2

0004619000

0004619-000

特２５４－４１２

改造内閣の舞台裏を見る

早川洗・著

代々木出版社

昭和１３

ABC

この著作物は、著作権者不明のため、著
第６７条の規定に基づき、平成１２年３
付けで文化庁長官の裁定を受け使用する

特254
42

目次

一、近衛内閣の大改造……（一）
二、戰時外交を背負ふ惑星宇垣一成……（四）
霞ヶ關外交の再建……（四）
異彩のある軍人……（六）
「日本一の男に成る」……（八）
政界の惑星……（一〇）
「宇垣内閣」の流産……（一二）
宇垣に反對するもの……（一三）
再起する宇垣派の策動……（一五）
三、戰時財政經濟の希望（ホープ）・池田成彬……（一七）

大・文・一・研究室・昭和十三・

池田成彬の人氣……（一八）
青年時代……（二〇）
三井銀行に入る……（二二）
駈引の鋭い男……（二四）
戰時内閣の立役者となる……（二六）

四、文教刷新の舞臺に將軍荒木の登場……（二八）

荒木と宇垣……（二九）
「木劍をもつて登壇するよ！」……（三一）
軍人らしい如才なさ……（三三）
青年將校の話し相手……（三四）
ジエネラル・アラキの活躍……（三六）

一　近衛内閣の大改造

都下の新聞は五月二十六日の午後、一齊に近衛内閣の大改造の號外を出した。

昔から命取りと相場のきまつてゐる内閣改造をものの見事にやつてのけ、宇垣・池田・荒木といつた大物をあつさり持つてきた手際は、近衛公の政治的貫錄を示すものとして、もつぱらの好評を博してゐる。

近衛内閣はこゝに名實ともに戰時强力内閣としての内容をとゝのへ、實質的には第二次近衛内閣を組織したやうな感んじを與へる。まさに準政變的な内閣改造であつた。

近衛内閣が組織されたのは昨年の六月、まだ大陸に戰爭は始まつてゐなかつた。從つて戰局の進展とともに、平時體制の構へを、事變對處の必要上、漸次戰時體制にとゝのへることが必要となつてきた、その努力はすでに昨年七月末頃から行はれてゐたのである。

秋に參議制度を實施して、宇垣、荒木、末次、安保、鄕、池田、松岡、前田、町田、秋田の十人の參議が選ばれ、この參議の會合が後には閣議より重んじられてゐるといふ噂さへもたらしはじめた。安井の代りに木戸が文相となり、馬場の代りに末次が内相となつた。今年になつて厚生

省が設置され、木戸が兼任した。

さうした中に第七十三議會が開かれ、國家總動員法、電力管理法案、八十億の尨大大豫算、其他政府提出の八十六件の法律案が全部成立した。こんな成績のよい議會はなかつたと言はれてゐる。

しかし議會がすんで、まだ後に、近衛の發行した多くの手形が殘つてゐる。曰く、貴族院改革、行政機構の改革、任用令の改廢、內閣制度の刷新、選擧法の改正等々。

その上、支那事變は、ます〳〵重大性ををびてくる。

議會の末ごろから首相は强力な內閣改造をやるか、改造不可能なれば辭職するかの、この內どれかをとらねばならぬところまでたどりついてゐた。つまり準戰時體制から、戰時體制への轉換である。

しかもこの長期戰下の諸情勢の下に、近衛首相の退却はどうしても許されなかつた。

かくて、

一、內閣自身の强化

一、大本營連絡會議の强化

を大眼目として、徐州陷落をモメントとする政戰兩方面における一段の飛躍をなすために內閣改造が、着々準備されたのである。

先づこの改造の重心を時局關係方面におき、外務大臣、大藏商工大臣の更迭强化と厚生大臣の專任を目指し、まづ廣田外相、賀屋藏相、吉野商相に話を持ちかけた。廣田外相は內閣體制强化のため快く引退を應諾し、賀屋、吉野兩相は、以前より兩省の一元化を主張し、且つ池田成彬を後繼者として推してゐたので、喜んで承諾、「內閣體制强化」のためといふ從來例のない辭表を提出さへした、この三相の圓滿引退により、その後任に兼ての企圖通り、外相に宇垣、藏相兼商相に池田、厚相を木戸、文相を荒木となすことに決定した。然しこの最後的決定までには、いろいろの案も出てきて、前田米藏の入閣も考慮された。これは民政黨の町田總裁とのバランス上、中止となり、末次內相を厚相にする案も出た模樣である。

ともあれ、懸案の內閣强化改造は遂に斷行された。名實共に充實された戰時內閣は、面目を一新して新なる立場から事變下の對內外諸政策に一歩乘り出したのである。

この內閣に新に大臣となつた、宇垣、池田、荒木は、恐らく今後の政策に重大なる役割を演ずるであらう。

轉換期日本に重大なる役割を演ずる彼らは、どんな人物か。こゝに紹介する次第である。

二　戰時外交を背負ふ

惑星・宇垣一成

霞ケ關外交の再建

今度の內閣改造で、宇垣大將の外務大臣就任はまさに大向ふをアット言はせ、同時に沈滯のドン底にあつた霞ケ關外交に一抹の光明を點じたものである。

新外相の政治家としての經歷手腕についてはいまさら喋々するまでもなく、わが國の第一流の政治家に數へられてゐる、昭和政界の裏面史を繰るものは、恐らく誰でも、それが宇垣派の政權獲得の暗躍に埋められてゐることを發見するだらう。だがこれは後で述べるがさうした彼の一般的人氣が、昨年一月の組閣流產の原因となつたかも知れない。

しかし今度彼が外務大臣に就任するについては、軍部も財界も一齊に支持してゐるのだ。彼の外務大臣就任は、現下の時局重大のしからしめるところであるのは勿論だが、同時に霞ケ關の歷

史から見ても重要な意義を持つものである。

未曾有の難局に直面した帝國現下の國際關係打開の重大使命を帶びて登場した宇垣新外相が果して如何なる手腕をふるふかは各方面より多大の期待をもつて注目されてゐる。

目下のところ新外相が親任式の後で語つたとほり、「外交の要諦が國交調整にある」ことと「日本の現狀は全國民の熱誠なる支持を得ずしては遂行を期し難い」ことゝの原則論を示したゞけで所謂宇垣外交の全貌は明らかにされてはゐない。しかし各方面から推して、同外相の今回の出馬が、軍部の全面的支持をうけたこと、新外相の政治的手腕、經歷からみて今後の帝國外交は更に一段と强化されるものと見られてゐる。即ち新外相が軍部との密接な聯携によつて擔當する戰時外交の遂行によつて、滿洲事變以來の弊たる外交多元性は漸次實質的に一元的となると共に從來の追隨外交から一轉して毅然たる自主的外交の確立へと邁進するものと見られてゐる。かくて近年、その健在を疑はれ來つた霞ケ關外交は一新されるであらう。

宇垣大將は首相からの正式交涉を受けるや

一、內閣の徹底的改造

一、一元的對支機關の設置

一、戰局の徹底的遂行

等に關し若干の希望を條件として承諾したと傳へられてゐる。

即ち宇垣外相としては從來の外交不振の根源を剔抉して、新外交方針をたてることとならう。殊に彼の政治的閲歴に見る中庸性と大陸政策における體驗と識見とは、英、米、ソ、佛等との摩擦を適度に調整しつゝ、且つ日獨伊防共樞軸の强化とともに、我が大陸發展の必然の線に沿うて發刺たる外交活動を展開するものと見られ、從つて今來、內閣と外務省との相剋摩擦の因となつてゐた對支中央機關設置の問題も宇垣外相に對する人的信頼から容易に政治的解決を豫想され、外務省の機構改革及び人事刷新の諸問題についても特異なる手腕を發揮するものと見られてゐる。

異彩のある軍人

歴代內閣表をくつてみても、軍人の外務大臣は餘り前例がない、これは確かに御時勢のしからしめるところであらう。

ずつと古いところでは榎本武揚といふ海軍中將がゐる。この人は幕府の海將で函館の五稜廓にたてこもつた英雄で、ロシヤ公使をやつたことがあるので外相となつたのも一向不思議ではない文部大臣にもなつたことのある人物だ。

その後には桂太郎、寺內正毅、田中義一らの軍人首相が外相を兼任はしたが、專任の武人外相は宇垣大將が始めてだ。

又外交畑の埒外の人が霞ケ關に君臨したのは最近では後藤新平しかない。

このやうに霞ケ關が異例的に部外からしかも榎本武揚以來の軍部出身者を迎へながら、不安なく何んとなく清新の感んじを與へてゐるのは、恐らく宇垣大將の人柄から生れてくるものらしい所でこの宇垣の人柄といふのは何から成つてゐるのだらう。

陸軍大將宇垣一成の第一印象は「見るからに頼もしい」といつた感んじだ。永年の軍人生活のせゐか、持つて生れたたちか、顏色は正に錆の入つた黑さだ。七十一歲だが矍鑠たる老軀。艶々とした赭顏に白いヒゲが健康さうだ、毎日乘馬に出かけねば氣がすまぬと言ふ。

陸軍大臣時代の彼は、あのしや顏にカーキーいろの軍服がよく似合ひ、肩幅の廣さが、たのもしく、議會なんかで、閣僚達の打ち並んだ中に一際目立つて異彩を放ち、そのふてぶてしいやうな面魂は見るからに偉材を想はせたものだ。

しかし彼の人柄とは單に風貌からきてゐるのではない。

今更ら、陸軍部内以來の彼の經歷をもち出すまでもなく、彼の踏んできた道や、その心境などを綜合してみると、實にその人柄が多方面なことが分るのである。しかもその斷面は、甚だ大きい。

「日本一の男に成る」

生れは岡山縣赤磐郡潟瀬村、貧しい自作農の五男に生れた杢次少年(幼名)は恐ろしいきかん坊で、岡山師範を出て小學教師となつたが、これでは天下がとれぬと上京し、學資の要らぬ陸軍士官學校に入學した。故白川義則、鈴木莊六大將と同期で、陸軍大學まで優等で通したが、中尉時代に「俺は日本一の男に成る」と斷然名前を一成と改めたほど、羈氣滿々の青年だつた。

しかし生來の横太り、鈍重らしい風貌から同期生に「ドン垣」と綽名されたものだが、それで中々綿密な頭腦を持つてゐた、「ドン垣」が陸軍部内で本當に認められたのは第二次西園寺内閣時の軍務局長田中義一大將の下で働いてからである。彼の將來を囑望するものが、漸く多くなつた。

大正十三年一月、清浦内閣に陸軍大臣となり、ついで加藤高明、若槻兩内閣に留任した。彼が首相としての噂をたてられるやうになつたのは、加藤内閣留任以後であると言はれる、それより後、彼の名は政變毎に人の口端に上るやうになつた。即ち滿十四年、彼の名は首相候補者として喧傳せられてゐるのである。かういふ世間的人氣が、たゞでさへ野心滿々たる彼の精神に影響しない譯はなかつた。彼が滿幅の覇氣をつゝしんで私かに政治的準備をはじめたのも頗る當然であらう。

彼は、清浦内閣から、加藤、若槻内閣に留任、昭和二年齋藤總督が軍縮會議出席中一時朝鮮總督をつとめて、同四年濱口内閣に陸相となり、同六年辭任して、前官禮遇を賜はつた。同年豫備役を仰付けられ、同時に朝鮮總督に親任、以來昭和十一年六月辭任する迄、半島の政治に力をそゝいだ。

この永年の國務大臣としての經驗についで、足掛六年に亘る朝鮮統治の成功は、彼の心中に深く自信を植えつけたことであらう。

當時彼が人に語つて、

「俺は總理大臣に是非なりたいとは思つて居らん。しかしどうしても俺がならんやうな時がきた

ら、日本のために不幸な時だ」
と言つてゐた。その抱負を見るべきである。

政界の惑星

彼が陸相として權力を振つたときは、恰度政黨政治が我が世の春を謳つてゐるころで、政府の政策、經綸が最も活潑に行はれた時代であつた、從つて彼が文治各相の間に伍して經世の骨髓を體得するには實にめぐまれてゐた譯である。

かくして育くまれた行政的手腕のせゐか、朝鮮總督時代の治績は大いにあがつた、產米、產金棉花栽培等々、政策施設すべて肯綮に當り所謂「朝鮮景氣」を作りあげた、いはゞ朝鮮は彼にとつて政治、經濟の實習學校であつたといへよう。

その頃から彼の政治的手腕が次第に圓熟して、そのために一部には「政界の惑星」としての彼の動きが注目されるやうになつた。

宇垣はやがて、朝鮮總督を辭して、若き將校時代の頃から行きつけてゐた伊豆長岡溫泉に悠々自適の生活を送ることになつた。

宇垣が朝鮮總督を辭して南が後任となつたのは、二・二六事件もすぎて、秋となつた頃である宇垣が本當に總督を辭す考へを起したのは、昭和九年の冬頃、恰度關東軍司令官駐滿全權に赴任する南が、途中宇垣に、

「若し政界に志を有するなら、このまゝ朝鮮にゐて機會の來るのを待つてゐても駄目だ。寧ろ裸になつて東京に待機してはどうか」

と進言したためであると言はれてゐる。

しかしこれは種々の事情でをくれて、やつと昭和十一年の九月に實現した。彼の後任としては南が推薦されて、朝鮮總督となつた。

「宇垣內閣」の流產

宇垣が朝鮮總督を辭任して、政局を待機するやうになつてから、政界は俄かに宇垣政權可能の空氣を濃厚にしてきたと言はれてゐる。

しかし、宇垣に對する反感も亦少くはなかつたのである。

昭和十二年一月二十四日、廣田內閣辭職とともに、大命はつひに宇垣に降下した。

萬年首相候補と言はれてゐた、彼に愈々大命が降下したのである。彼はつひに立ちあがつた。しかし從來の衆望の強さにも拘らず、彼の組閣工作は思ひがけない障害に面した。

猛烈な反對運動が軍部から起つたのである。反對の氣勢は日一日と激烈になつていつた。一方大衆の人氣はそれに反比例して刻々高まつて行つた。

三日目ごろから、流産するであらうといふ噂は段々高くなつていつた。反對勢力が俄然強まつたのである。

ある人が、早く拜辭すれば、大命は將來再び彼に下るであらうと言つたとき、彼は、靜かに答へた。

「ご傳言の主旨はありがたいが、自分は巧みに身を處して再起しようとは思つてゐない。これが最初の且つ最後の組閣の御奉公だと思つてゐる。そして日本の政界の障害が何處にあるかを知つてゐる自分は、一身を投げ出してそれと戰つてゐるのだ。かうしてねばつてゐること自身にも、大きい意味があるのだ。國民にはつきり解るであらうと思ふ」

と彼は答へた。又ある深刻な秘策を献じた人に答へて、

「ご好意は辱い。しかし自分は一切の策を用ゐない。飽くまでも正々堂々とやる」と答へたといふ。

一月二十九日の朝に至つて、萬策つきた彼はつひに大命を拜辭することに決心した。

宇垣に反對するもの

『拜辭後數日間に四千二百通の激勵文を彼は、受けとつた。

『今日の彼の心の中に聞えるのは「これが最後の御奉公ではなかつたな」といふ聲であらう』

と鶴見祐輔は書いてゐる。

『彼が拜辭の翌日、明朗な表情をして人に接してゐたのは、さういふ新しい聲を心の耳に聞いてゐたからではなかつたか。恐らくは彼が松籟山莊で今も聞いてゐる聲もさうであらう』と。

五日間の苦鬪の暗示、——

「それこそ、七十の手習ひをはじめるかな」と、拜辭後數日たつて笑ひながら、彼は語つたといふ。その後彼は國立の村に移つて、商科大學の講義を聽講したりした。

なぜに彼の組閣にはそのやうに反對があつたのか。ある消息通は、

「宇垣の出廬を妨げて居つた障害は大半片附けられて終ふた、只一點殘された問題として指摘す

るのは、今日が肅軍時代で、宇垣もその原因に關する責任者の一人として敬遠されてゐたから、流產されたのだ」

と語つてゐる、どうやらこれは本當らしい。昭和九年齋藤內閣が所謂、帝人事件で、瀕死の重態に陷つた頃、宇垣が朝鮮から上京したとき、海軍がロンドン條約成立當時の宇垣の閣議における統帥權についての主張を根に持つて、宇垣內閣に反對し、林陸相もまた、齋藤首相に向つて、

「宇垣は乃公一度出づれば、政黨も財閥も翕然として集ると思つてゐる、その認識に、この時局と適當しないものがある」

と主張し、長老山本達雄の意見に反對し、宇垣內閣は流產となつた。その當時にくらべれば昭和十二年の海軍は、

「陸軍さへ陸軍大臣を出すならば、こちらも異議はない」

といふ態度とまでなつてゐた。所が陸軍は、

「今日陸軍は極めて重大な事態に直面してゐる、然るに、この事態は久しきに亘つて、陸軍大臣の要職にあつた宇垣大將にも、責任があるかの如く、部內に信じてゐる者もある。また○○事件についても宇垣大將に疑惑の目を向ける者があり、その結果は、如何なる事態が惹起しないとも

限らないから、宇垣大將が總理大臣となることは、部內の統制上甚だ困る」といふので、即ち「肅軍の途上」宇垣に出られるのは具合が惡いといふのだつた。

再起する宇垣派の策動

政黨と軍部を結ぶ革新的內閣の首班者たる事が豫想されながら、無殘や事ならず、萬斛の恨みを呑んで、彼は伊豆の閑地に再び松籟を聞く身となつた。組閣拜辭と共に陸軍大將の官をも辭したのである。

內閣の組織に失敗して間もなく、半世の伴侶であつた夫人を亡くした彼は、心身の鬱悶に打ち勝つべく、伊豆の別莊に、或は國立の別邸に都塵をさけて、乘馬と散索に專心してゐた。この失敗は、彼の心構へ、生活態度を一變させた。枯淡な心境が彼を心配した。

その頃の彼の背廣を着た姿は、軍人あがりといふよりもどこか、田舍の篤農家といつた感じだつた。

同年の秋、支那事變の全面的擴大と共に、近衛內閣强化の必要が痛感されはじめた。參議府が設置されることとなつた。馬場鍈一が內閣の意志を齎して、宇垣に參議の就任を求めた時、彼が

かう言つた。

「かういふ非常時に際しては、お役に立つことがあれば、自分としては、決してこれを廻避すべきでないと信じてゐるが、しかし、自分の內閣組織に際しては非常な反對があつて世間を騷がした。その反對はいまでも解決してゐない。從つて、自分が參議になつたが爲めに、近衛內閣に累を及ぼすことがあつては本意ではない」

宇垣が、參議に復活すると共に、政界では再び南內閣擁立運動に對抗するやうに、宇垣內閣の話題が徐々に起つてきた。

宇垣を支持する層は、財界、朝鮮窒素王野口財閥や、關西財閥等がその資金網をなすと噂されてゐる。貴族院方面でも公正會の軍人出身の男爵議員をのぞいて、火曜會、研究會あたりの支持があり、官僚方面にも後藤文夫、今井田清德をはじめ、少からぬ宇垣ファンがゐる。民政黨の川崎克、俵孫一、政友會の砂田重政は言はずもがな、民政、政友兩黨のみならず、國民同盟の幹部をもをさへてゐると言はれてゐる。いな幹部のみならず陣笠連にまで亘りをつけてゐる……といふのが事實らしい。

しかも元老・重臣は今でも宇垣を重視し、非常時日本の救濟のため、彼を求めてゐると傳へられてゐる。

軍部でももはや海軍は、無干涉、陸軍も「肅軍さへすめば」といふところまで來てゐるのだ。宜なり、彼が參議になつてから半年、その參議の席上では斷然、他を壓して一人舞臺とまで言はれた宇垣が、今回の內閣改造に外相として就任するや、軍部、財界をあげて、多くの支持をうけ、新外交樹立を期待されてゐる。誠に當然と言へよう。

長年問題にされてゐた宇垣が、この非常時にどの程度まで、その經綸をふるひうるものか。それは今後の問題である。

三　戰時財政經濟の希望・池田成彬

林內閣組閣の時も近衛內閣のときも、たえず噂に上つた人物、その後もまた藏相、厚相等の椅子に再三交涉され、その度に、持病の膽石病を口實に斷つてきた池田成彬が今度こそ愈々立ち上つたのだ。餘程の自信と覺悟があるものと言へよう。

昨年二月九日、深井英五に代つて日本銀行總裁に就任した池田は、新聞記者團を前にして語つた。

「一度財界から身を引いた自分として今度日銀總裁の要職をお引受することになつたことは、自分としては相當の理由と信念に基くものであります、單に後任總裁としてといふ交渉であれば當然お斷りする、併し現下の時局は極めて重大であります……。時局を憂ふる點において自分は大藏大臣と同感で、玆に一身を挺して御奉公を致す決心をしたものであります」

その後一年、時勢は急轉した。支那事變を前に、日本の戰時體制は進んで、今や國内の情勢も一大轉換期に望んでゐる。彼が藏相就任の決意を固めた以上胸中秘かに大抱負を持つてゐるに違ひないのだ。

池田成彬の人氣

池田成彬は財界の中心人物として實に三十年の久しきに及んでゐる。「花に百日の盛りなし」といふ以上、三十年の盛名は大したものである。財界の大御所などといふ尊稱は拔きにして、要するに、「池田さんには頭があがらぬ」といふ人間の數は相當に多い。現日銀總裁結城豐太郎の前

藏相時代、よく談話中「池田君」といふ言葉が新聞に出たものだが、これは恐らく記者先生の誤りだらう。假に百歩を讓つて結城藏相がほんたうに「池田君」と呼んだにしても、そいつは日銀總裁を監督下に置く大藏大臣として止むを得ず「池田君」と呼ぶだけであつて、腹の中では「池田さん、濟みません」といふ氣持が充分にあると言つてよからう。池田は本年七十二歳、結城は六十二歳、どつちもお爺さんだが、十歳の違ひがあるから、それだけでも結城が池田さん扱ひにするのは當り前、いはんや公私共に結城が多年池田に兄事したことを考へると、昨年の結城藏相池田日銀總裁が何かの都合でさうなつたまでのことで、今年の池田藏相兼商工相、結城日銀總裁のコンビこそ、當然といつていゝのである。ましてや、池田は結城の鄕黨の先輩でもあるのだ。

當時、すでに世間では池田が大藏大臣を懇望されて是を辭退して日本銀行の總裁を引きうけたといふ者があつたが、それももつともで、彼の經歷を見れば大臣の位置が彼の一生に何の箔をもつけるものでないことがわかるのだ。池田は地位よりも仕事を重んじてゐるのだと當時言はれたものである。

四十を出たばかりで三井銀行の取締役となり、早川千吉郎氏の跡をうけて專務取締になり、ついで合名の常務理事として久しく三井王國に君臨し、一昨年一旦閑地に退いたが、昨年二月結城

藏相の懇請もだし難く、日銀總裁となり、辭して間もなく內閣參議となつた。實にいつになつてもお拂ひ箱にならぬ人物である。この經歷だけでも、財界は言ふに及ばず、社會各方面に掩ひかぶさる壓力が相當なものであることは想像に餘りありと言へよう。

財界におけるいろ〳〵のもつれが屢々、彼の手によつて裁かれ又近年は、國家の經濟政策的施設が、多くなると必ず、彼は財界代表者として政府の相談相手となつたものである。

後輩たる結城氏の求援に應じて日銀の首班となつて以來、政府との聯關は一層密接となり、更に現內閣成立以來は、近衛首相の懇ひをいれて、しば〳〵力添へをしてきたものである。陰に陽に、賀屋財政を支援してきたのは勿論のこと、今次の政變に際して、財界にかねてより囑望されてゐる宇垣を外相に推したのも池田だと言はれてゐる位で、今後の近衛內閣はをそらく、この近衛、宇垣、池田の三頭會議で大勢が決するとまで言つてゐる者も少くない。

では「池田さん」はほんとに偉いのか。いやなぜ彼はこんなにもてるやうになつたのか。ひとつ檢討してみよう。

青年時代

舊米澤上杉藩の家老職池田成章の長男——世間では普通さう言はれてゐる。だが、よく聞いてみると、池田家は米澤藩の家老職ではない。彼の嚴父成章氏が藩中に俊敏を以て鳴り、擇ばれて藩の重職についたまでである。

この父の俊穎の血をうけて生れたのが慶應三年、翌年は明治元年だ。鷹山公以來の米澤上杉藩の氣風の中に育つた彼には自ら高邁な風格がそなはつたと言へよう。明治十九年二十の年に慶應義塾に入學して福澤諭吉翁の薫陶を受け、塾の留學生の資格で米國のハーヴアート大學に遊び、經濟學を修めて、バチエラーオブアーツの學位を得て歸つてきた。日清戰爭の終つた明治二十八年に歸朝し、一時時事新報記者となり、毎日論說を書いてゐた。だがこの論文たるやあまり紙上にはのらなかつたらしい。だがこうした記者生活のおかげで、自由の空氣の何ものたるかを知らないわけではない。

今度の入閣に際し、押しよせてきた新聞記者を相手に「生活の主義——まあ飯をゆつくり食ふ事サ」

と言つてゐるが、まさかそのためでもあるまいが、彼の慶應在學時代は最後まで自炊をやつたらしい。牛の頭を買つて一と月もそれを食ひつゞけ、牛の舌を五日も六日も食はねばならなかつ

たので、今でも牛の舌が嫌ひだなどといふ珍談もある。

アメリカの大學に在學中もよく同級生に日本料理をふるまつたものだ。すき燒をやつて醬油が煮つまつて、下宿屋のお内儀さんに「何をしてるんですッ」とどなりつけられたり、白い瀬戸物の洗面器にキヤベーヂをナイフで切つて入れ、鹽で揉んで酢をかけるといつた名コツク振りを發揮してゐる。

アメリカへ行つたのが二十四の年、そのころまでは非常に身體が弱く、とても駄目だと言はれてゐたのを、やつとのこと留學させてもらつたのが、在米三年間にすつかり身體をよくして歸つてきた。

三井銀行に入る

三井銀行へ這入つたのが、二十八年の十二月、最初は本店の調査係だつた。この調査係といふのが、後に三井の「梁山泊」として有名になつたところで、つまり幹部養成所のやうなもの、今で言へばさしづめ三井銀行の内國係のやうなものである。その頃の銀行家は算盤も出來ず、簿記も知らないと言つたのが多くて、大抵は新聞記者を長くやつてゐたといふ連中ばかり。勿論三十

以上で銀行に入つてくるのだから、紙幣の勘定なんか出來つこない、まづ銀行の法規などを研究させる。朝から晩まで議論をしてゐて、これが一年半ほどたつと皆支店長になるのだ。

當時彼と一緒にゐたのは、後に藤本ビルブローカーの會長になつた平賀敏、現在三越の監査役をやつてゐる鈴木梅四郎、三四年前まで三井銀行常任監査をやつてゐた山本龜光、王子製紙取締を辭して現在鎌倉に隱居してゐる林健、それから藤原銀次郎、といつた連中だつた。後に三井銀行の支店長をした人は、皆こゝにゐたらしい。その頃係長が鈴木梅四郎で、池田もその幕下にゐたのである。

彼は中上川彦次郎の女婿とはなつてゐたが、もちろん、世の所謂閨閥にあやかるやうな代物ではない。とんとん拍子に進んで、足利支店長から、後に本店營業部長、四十二年には常務取締役となつて、前後三十八年にわたる八面六臂の活動は、やがて三井銀行の池田か、池田の三井銀行かといはれる程となり、同時に財界を牛耳るほどの貫錄をもつことになつたのである。

昭和八年三井コンツエルンの總本山たる合名會社の常務理事となり、別に東京手形交換所の理事長とか、日本銀行參與とか、日本經濟聯盟會理事とか、内閣審議會委員などの財界人としての最高位を占めた。一昨年四月末彼は、みづからつくつた三井合名の停年制實施と共に、三井を去

り、一切の公職も退いて、財界からすつぽり引退したのである。もちろん、これが二・二六事件の特筆すべき社會的出來事であつたことは言ふまでもない。

駈引の鋭い男

池田はなぜこんなに出世したか。恐らくその「卓犖不羈の性格」と「俊敏の才」又は「明察と果斷」によつてそこまでこぎつけたのであらうと言はれてゐる。

東北的のそして武士的のきつさがその底にひそんでゐる。この氣概が財界にあつてものをいつた。彼が事に對するや、寔に用意周到で十分考慮研究を重ね機の熟するや、たゞ「斷」の一字あるのみである。狙ひがきまれば、擊つて放つに毫末も逡巡するところはない。

この駈引の鋭さから、世間にかなりの憎しみを買つたのだ。昭和二年の金融恐慌當時の臺灣銀行のコール引揚げ問題、それからかの有名な昭和六年の弗買ひ問題等で不道德呼ばはりされたのもその爲だ。

但しこのドル買ひ問題は誤解で、當時英國の金本位停止で、爲替をやつてゐたものは皆それを埋め合せるのにドル買ひをやつたので、三井も亦それ以上のことをやつたわけではない。この

時はどの銀行も損をしたのだと彼自身後に辯明してゐる。

とにかく當時の池田はあまりにも世間の注目の的となつてゐた。財閥と言へば、三井、三井といへば池田、財閥攻擊は全部池田に集中されたのだ。彼の前任者である團琢磨男は昭和五年非業の死をとげてゐる。つゞいて五・一五事件、やがて二・二六事件等と續いた慌しい社會樣相は、彼を反省させるには十分であつた。世相が險しさを加へるとともに喬木に風强しの譬の通り彼のそびやかした肩にもつぶてが當りかねなくなつたのである。

昭和八年三井合名に入つてからは、既成政黨の無力化に氣がついたのが、彼の對外工作は漸く革新勢力の各層に向けられた。そのかみ各黨には大枚の資金が毎年三井から出てゐたのが、漸く池田を通じて三井と新興勢力とのつながりも深くなつたと噂されるやうになつた。それは大體五・一五事件前後からだと言はれてゐるが、平沼男の主唱する國本社に池田も結城も理事として、同鄕の小磯將軍と肩を並べてゐた。

從つて、時が經つにつれて右翼からの素朴な三井攻擊、池田排擊の聲は薄らぐとともに、池田と個人的に交渉のできたものは、次第に池田個人の高潔な人格、淸廉な人格、卓拔した識見、剛毅な精神に傾倒するやうになつたと言はれる。

池田は嵐のやうな非難を默つて聞きながら、所謂三井財閥の轉向工作に努力し漸く、南條、金子、島田のトリオを得て、二・二六事件を契機に三井から引退することとなつた。

戰時內閣の立役者となる

三井王國の王座を去り財界の第一線を退いた彼は、大磯の農園に土をいぢり湘南の空を仰いで雲の往來を打眺める閑かな境涯となつた。だが本來の武人的性格は今日の非常時局が要請する何物かを持つてゐるらしい。

昭和十二年、宇垣內閣流產、林內閣成立當時、池田藏相說がどことなく傳はりだした。これには相當の消息通も驚いたものである。それは池田が三井を退き財界から隱居してゐたからではない、財界の代表としてあれほど「現狀打破派」から怨まれた池田が椅子もあらうに大藏大臣、しかも軍部が支持してゐる林內閣に列するとはと、所謂消息通達が驚いたのである。

だが時勢はすでにうつり替つてゐたのだ。國防を充實するために必要な生產力擴充を達成することが漸く當面の緊急事となつて、軍部の要求する生產力擴充により財界をも繁榮させ、軍部と財界との無用の對立や摩擦を解消させるといふ聲が、軍部、財界兩方面から起つたのである。結

城藏相の所謂「軍部と財界との抱き合ひ」といふこととなつて、池田はつひに出馬して日本銀行總裁となり、日本銀行の機能を大轉換させて、こゝに生產力擴充の路へ一路邁進することとなつた。

五月、林內閣辭職とともに、病身のため、かつ後進に路を開くためと言つて辭職した後も、陰に陽に賀屋財政を援助して、軍部と財界の無用な摩擦をのぞくために努力してゐた。

支那事變勃發とともに、近衛首相は、內閣强化の前提として參議制を設けた。池田ももちろん選ばれて參議となつた。この參議制は宇垣、池田等の一流人物を入閣させんとする第一步だと當時批評するものがあつたのは無理からぬことである。

やがてその豫想は實現された。

今度の入閣は實に首相の三顧の禮もだし難く七十二歲の老軀をひつさげて廟堂に立つたものと言へよう。

池田の藏、商工兼任の椅子は、やがて戰時財政經濟一元化の建前から「經濟省」設置の前提となるもので、やがて池田「經濟省大臣」の出現するのも遠からぬことと見られてをり、今後の大本營連絡會議には、宇垣新外相と共に政府側の双璧となるであらうと言はれてゐる。

「昭和十三年こそ、あらゆる角度から見て、日本としては最も重大な時機です」

と、今年の春、七十二翁、池田成彬は語つた。

顧みれば昨春、日銀が大轉換をしてから一年、池田總裁が描いた生産力擴充の種子は豊かに實つて、刈り取るべき時機となつた。物價問題、物資問題、爲替問題、金問題等々、池田新藏相はこの難關突破を期待されてゐるのである。

四　文教刷新の舞臺に

將軍荒木の登場

宇垣外相の就任が意外であつたやうに、荒木文相の就任も思ひがけない。

武人文部大臣は、首相の兼任を別としては、第一次黑田内閣の海軍中將榎本武揚、第二次山縣内閣の海軍大將樺山資紀以來のことだ。

精神家、皇道主義者、東洋主義者といはれる、本年六十二歳の男爵荒木貞夫大將が再び非常時の嵐の中に登場した。

昭和六年の十二月、滿洲事變直後の非常時に、犬養内閣の「中將大臣」として陸相となつたときの彼は、文字通り颯爽たるものがあつた。その鮮かなデビュー振りはまさしく荒木大將傳中の壓卷であらう。その後昭和九年一月病氣のために辭任するまで、所謂荒木大將時代を作つて、軍部の花形となつて活躍した。滿洲事變の功績により、男爵に叙せられたことは周知の事柄である。以來大將の名は華かに世間に映り日本を訪れる有名無名の外國新聞記者、ジャーナリスト等まで、まづ荒木陸相を訪れて、得意の精神論を聞き、「ジェネラル・アラキ」の名を海外にまで傳へたものである、英國の諷刺作家バーナード・ショーと荒木陸相の對談は、新聞を賑はしたものである、客來れば大いに談ずる彼の態度は型破りの陸相たる感を深めたものである。

荒木と宇垣

二・二六事件の責を負つて、豫備となつてから一年半、近衛内閣に參議府が設けられるや、彼が參議に選ばれ、再びフットライトの光りをあびて政治の舞臺に現れてきた。

當時ある一部の消息通は、近衛が參議府を設置したのは、宇垣を相談相手にするためだといつた。この宇垣に配するために、荒木が引つぱり出されたのだ。宇垣と荒木といへば、いふまでも

なく陸軍内の兩極端派の代表者である。

荒木は武藤、眞崎の系統で宇垣とはまさに對立的位置にある。この兩人を一堂に會せしめることに成功したのは、水際だつた人選だと、當時言はれたものだ。勿諸荒木は往年の荒木でなくなつてゐたことは、言ふまでもないが、部内の强硬派を代表する歴史的關係は清算されてをらぬと見たのである。

同時に海軍からは、硬派のビカ一、末次信正に配するに、條約派の前海相安保清種をもつてした。軍部のかうしたとり合せに、政黨からは、町田、前田、秋田の三人が、財界からは、郷、池田の二人が參議に選ばれた。

その後、まづ末次が内相に就任し、ついで今次の内閣改造となり、宇垣、池田、荒木の入閣となつたのである。

今次の内閣改造についても、荒木大將の就任は宇垣大將を迎へる關係上バランスをとるために起用されたものだと一部ではといてゐる。そして文相に荒木大將を据えるために木戸侯を厚相に專任したもので、從つて荒木大將は全く宇垣大將との均衡上選ばれたものであるからこの點宇垣池田兩氏の入閣とは多少事情が異なると見るのである。

だが他の一部では、荒木大將は、參議就任以前から首相の帷幕たる秋山定輔、故志賀直方等とは別個の意味で首相側近のブレーン・メンであつたことは斷るまでもない、改造それ自體の相談役として荒木大將は當然入閣を約束されてゐたものと信ずべき理由があると同時に、陸軍の大長老としての同大將入閣は現下の政戰一致强化の建前からも特に重要視すべきであるとしてゐる。

ともあれ、徐州陷落後の新戰局に對應すべき大本營連絡會議の列席閣僚が、從來近衛首相以下廣田外相、末次内相、賀屋藏相であつたのが、内閣改造の結果、内相の外に宇垣外相、池田藏相は當然のこと、荒木文相も特に連絡會議に出席するやう近衛首相より奏請されるであらうと傳へられてゐるのである。

「木劍もつて登廳するよ！」

荒木新文相は親任式終了後、文相官邸において左のやうな就任の挨拶をのべた。

「議論や理窟は後廻しだ、たゞ大いにやるだけさ。

わしはこれまでの文部省の方針を、早急に改革しなけりやあ、ならんといふやうな抱負なんか、今持つてはゐない、これから幹部の意見をよく聽き、又よく研究した上で改革すべきこと

はどし〳〵しやべらずに實行に移して改革してゆくつもりだよ。この不言實行！　これが教學の本義ぢやとわしは思つとる。

大學なんか何ももめてはをらんぢやないか。何で、騒ぐほどのことはないんぢや。あれが當り前だ、赤ん坊が這つてると云つて騒ぐのはをかしいよ、赤ん坊は這ふのが當り前ぢや。

大學斷髪令なんか、わしは出さんよ、みんな顔が違ふやうにそれに應じて頭の髪も適當にやるがいゝぢやないか、喧しく云はんといふのが即ち皇道精神さ、その代り害が出たらビシビシやる。

文部省は體位訓練のところだ、寒稽古が文部省で、ラヂオ體操が厚生省といふものだ、これから文部省へ木剣をもつて行つて大いに振り廻すね。

今日はわしの誕生日だがわしは、

「天を忘れず、親を忘れず、子を忘れず、神を忘れず」といつた氣持でそれを祝ふつもりさ。

これは家庭教育上にはとてもいゝことなんで、これが又教學の本義さ」

荒木大將の教育家らしい風貌を語るものとしては、長男の貞癸君を、「日本の將來はサイエンスに負ふ他はない」といふ意見の下に、内燃學專攻の「科學の戰士」とした所にも現れてゐる。

同君は英國仕込みの若きエンヂニヤーとして本年三月歸朝したばかりで、父の文相就任を見ることとなつたのである。

軍人らしい如才なさ

親任式の後、新聞記者を相手に輕く氣焔をあげた荒木新文相は、二十七日午前九時四十分文部省へ初登廳をして、この日午後一時半行はれる本戸前文相との正式事務引繼ぎを前にして、丁度省内に開かれてゐた實業專門學校、高等學校長會議の最終會議に顔を出して就任挨拶と一場の訓示をやつた。

「日本の教育は既に七十年の歴史をもつてゐるが、この重大時局の折、學生、生徒の教育に當つては何も昔ながらの傳統に拘はる必要はない。改むべき點は大いに改めてゆきたいからどし〳〵意見を述べて貰ひたい、しかし教育は次代の人間をつくるのであるから、殊に怠らずに愼重に運びたいと思ふ」

と、抱負の一端をほのめかして、次いで閣議へ臨み、各宮家への御挨拶廻りを終つて、午後一時二十分再び登廳、木戸前文相と大臣室で約十分間の事務引繼ぎをやり、それから六階の會議室

に全廳員を集めて非常時型訓示を述べた。

翌二十九日、彼は東京朝日新聞を通じて第二國民への訓示をのべてゐる。その中に

「日本帝國に生れたわれ〳〵日本人ほど幸福なものはありません。日本人たることを誇りとしてお互にしつかりと自分の職分を守ることです。皇軍の將士が炎熱下に身命を捧げて戰つてゐるあの意氣込み、殉忠奉國の覺悟は小國民の子供たちも抱き、先生の敎へを守り、兩親に孝行し、大いに勉强して立派な日本人になることです。

健全な精神は健康な身體に宿ります、皆さんも大いに健康增進につとめて下さい」

云々とのべてゐる。

聞くところ彼の性格は直情徑行、情誼に厚く、人を愛する。武人らしい素朴な如才なさが一種の魅力だ。獨特の書法で字も書く。あの「貞夫」といふ署名の風變りなのも彼らしい人柄を如實に示すものと言へよう。

青年將校の話相手

劍をすてて丸腰で、廟堂にたつこととなつた新文相は生つ粹の江戸ッ子だ。しかも麴町番町の

士族の家庭に生れた。

陸軍では第九期生、杉山陸相よりは三期上、林大將より一期下、同期生には阿部信行、眞崎甚三郎、本庄繁等々の英才揃ひだつた。早くより部內の俊秀として知られ、日露戰爭には梅澤旅團の副官大尉として從軍し、また歐洲大戰中にはロシヤ軍の從軍武官として、前後八年硝煙のヨーロッパを馳せめぐつたものである。爾來彼は參謀本部のロシヤ通として知られることとなつたが大正十三年一月姫路の步兵第八旅團長から突如憲兵司令官に昇任し、ついで參謀本部第一部長として、總長鈴木莊六大將幕下の要職についてから、漸く荒木の名は部內に重きをなしはじめた。

とき恰も田中內閣で、かの有名な昭和三年の濟南出兵に對して、荒木は「政略的出兵」は贊同しがたいと斷乎反對の意志表示をして、大いに男をあげたものだ。

けれども、そのため上層部からうるさ型と見做され、陸軍大學校長から、後に熊本の第六師團長に轉出された。この頃から荒木は國本社の平沼騏一郎と相識る仲となつてゐたが、熊本の銀杏城下にあつて、精神家荒木の本領は漸く培はれたのである。彼は管下の將兵を集めて皇道精神をとき又朝夕となく青年將校を集めて、さま〳〵の問題について論じ合ふのだつた。彼は軍人には珍しい談論風發の人で、誰彼となく相手選ばず、よく談じ、いつしか青年將校の中心人物となつ

てゐた。

劍道をよくし、刀劍を愛し、高談を喜ぶ、この東洋趣味的の風格は陸軍部内にも喧傳され、肥後の熊本に荒木ありとまで言はれるやうになつた。

やがて、教育總監武藤信義大將に迎へられて、教育總監部本部長として東京へ歸つたときには、まるで凱旋將軍の感があつたと言はれてゐる。武藤總監の薫陶のもとに、武人らしい風格は漸く圓熟を加へてゐた。

ジエネラル・アラキの活躍

しかし何んと言つても彼の本舞臺は、滿洲事變の最中に成立した犬養内閣に、陸軍の衆望を双肩になつて陸相に就任してからのことだ。實際華やかな登場ぶりだつた。

彼が威風堂々といつた調子で永田町首相官邸に現はれたとき、我國軍政史上の大いなるエポックの鐘がうたれた。

閣議室の隋圓形のテーブルに音吐朗々たる彼の熱辯が奔ると共に、對露方策を中心とする新しい日本國防論は漸く實現の緒につきはじめたのである。

昭和七年五月十五日の夕刻、かの〇〇〇の襲撃に、犬養首相はあえなく倒れ、齋藤内閣が組織さるゝや彼は居殘つてひきつゞき、陸相をつとめた。

この政變のとき、彼が敢然としてある條件を持ち出し、鈴木内閣の出現を阻止したのは有名な話だ。

齋藤内閣では國防關係の五相會議といふ政治史上特筆さるべき不文の制度が出來、彼は、齋藤首相、廣田外相、高橋藏相、大角海相とともにこれに列した。對露、對滿方策についての大陸國策は、彼を内閣中の花形役者たらしめたのである。

ゼネラル荒木の名は歐米諸國にまで響いて、彼はもはや國際的な政治家となつてゐた。

五・一五事件を契機に、我國の政黨政治は漸く凋落に向つた。齋藤内閣以來、所謂擧國一致内閣なるものが生れ、陸軍も目まぐるしい轉變をつゞけた。この大轉換の中心に荒木陸相はたつてゐたのだ。

昭和九年病氣をもつて陸相を辭任し、同十一年二・二六事件の後をうけて豫備に退いて後は、皇道義會の總裁として今日に及んでゐる。教學刷新が叫ばれ文教の府に革新が要求される今日、彼が軍刀をすてた政治家としてどの程度の功績をあげうるか、衆目の注視の的となつてゐる。

愛讀者へ謹告！

□ 本社は愛讀者各位の御厚情と全社員の奉仕的努力によつて今や完全に冊子界の最高峰を濶歩して居ります。各位の一層の御愛讀を御願ひ致します。

□ 愛讀者各位に新刊の御通知や、又は連絡を圖るため愛讀者カードを作製致して居りますから、御手數でも本書御買求めの方は是非左記事項をハガキで御知らせ下さい。

一、お求め書の題名　一、お求めの場所
一、讀後感　一、御住所御氏名
一、いかなる種類の書物の出版を希望せらるゝかも併せお知らせ下さい
一、出版希望の方は御申出ください

特約販賣所　東京鐵道局公認鐵道保養會（鐵道各驛ホームスタンド一手販賣）鐵道弘濟會新聞部栗田書店　新正堂（大阪）

昭和十三年六月十日印刷
昭和十三年六月二十日發行

定價十錢（送料三錢）

著者　速水憲吾
東京市澁谷區代々木山谷町九三
發行人　森本信次郎
東京市赤坂區丹後町九七
印刷所　照井印刷所
東京市澁谷區代々木山谷町九三
發行所　代々木出版社
電話四谷(35)五〇五七番
振替東京一〇八〇〇番

一手販賣取次所　東京市神田區須田町一丁目二十四
パンフレット及雜誌全國驛壹店配給元　鐵道厚友會
電話神田(25)〇九三一番
振替東京一〇六五七二番

東京
代々木出版社